



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.13

2019

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (10)

道を求める心とは (2)

岡本英夫

さて半偈ということでもう一つ考えてみたいと思います。それは、教えを聞き道を求めていく私たちは、今どこにいるか、という問題です。

求道の道のりを、出発点->中間点->ゴールと、簡単な図式で考えてみます。ゴールというのはおかしくて、仏道にゴールなどないのしょうけれど、お話の都合上、一応ゴールを設定しておきましょう。私たちはそれぞれ、この、出発点->中間点->ゴールの間のどの地点にいるかということです。

何十年もの間仏法を聞いてきたベテランの人は、もしかすると、自分は中間点をはるかに過ぎ、ゴールの一步手前の辺りまできていると思うかもしれません。しかし、その人には次のように言わねばならないでしょう。いや、あなたはそんなところにはいない。あなたが立たねばならない場所は、ここなのですよ、と言って、中間点を指し示すのです。

そうするとその人は、いやこれまで何十年も聞いてきた、今がまだ中間点だとすると、今からまたこれまでと同じだけ聞いていくとすれば、もう時間が足りない、と言うかもしれませんね。

そうじゃないのです。時間の中間点を言っているのではない。聞いた教えの分量の中間点でもありません。あなたには、まだまだ、尋ね求めていかなければならないことがある、ということです。これから聞く教えは、これまでと同じ教えでも構わない。問題は、あなた自身をさらに深めていくことです。教えによってもっと掘られ、照らし出されるべきものがあなたの中にある。そこにメスを入れる作業が大切。メスを入れていただく作業の手が、なまぬるく、緩んできているのではないですか、ということです。緩んでいるからゴールは間近と誤ってしまいたいのでしょうか。



木のもとのお話(13)

阿弥陀の本願

阿弥陀とは限りない命と計り知れない光のことです。これはお釈迦様のお教えの真実の力の象徴です。私たち人間は阿弥陀仏に向かって祈るのではありません。真実の力は純粹で、煩惱いっぱいの人間の世界からとても遠いのです。この真実を私たち人間の世界で実感し、言い表すために名をつけました。それが南無阿弥陀仏です。阿弥陀仏があなたたちを救いましょうと誓った。それが本願です。その阿弥陀の本願を私たちが実感できた時に、南無阿弥陀仏といって答えるのです。祈りではなく応答です。南無阿弥陀仏は私たちがお釈迦様のお教えを通して真実に出遭った時の、喜びと感謝と願いを表す言葉なのです。

求道の中間点に立たなければならないのです。これまで長年お聞きしてきたのは、確かに苦しく厳しい状況の中、努力し頑張ってきた。自分でも、よくぞここまで歩んで来れたという感慨もあるのでしょう。しかし、今の時点で言えば、それは全て恵まれたもの、賜ったもの。よき師友からいただいたものばかり。これからは、自分が立ち上がって、辺りを見回し、そこにいる羅刹から教えを聞いていく。

即ち、これまで光の届くことがなかった自己のその部分を照らし出していただくのです。光が届かないようにしていたのは自分自身なのですから。その、光をさえぎろうとする自己の姿そのものを、新たに照らし出されていく。それはあなたにとって初めての経験、そこから開かれる世界は前人未達の天地。そういう歩みに立ち上がらなければならないということです。

そしてもし、そのような歩みが大変な努力のうちにしばらくの間なされた時、ここまで進んだぞ、どうだ、というのではなく、そこがまた中間点に立ち返るべき時なのです。歩み歩み、常に自分を中間点に据えて、過去の恵みに感謝し、新たな未知の世界、未踏の自己の領域に向けて自己自身が開かれていかなければならないのです。

一方、このようなベテランとは違って、ついこの間聞き始めたという初心の方もおられるわけです。そのような方は或いは次のように言うかもしれません。私はまだ聞き初めて、右も左もよく分からないので、出発点のところにいるかいらないかのようなものです、と。勿論、お気持ちは分かります。

しかし、そのような方にも申し上げなければならない。そのわずかの聞法が、あなたが賜った教えの世界。それは微々たるものかもしれないけれど、まぎれもなく真実の教えの世界。その教えを賜ってすでにあなたは歩み出した。そして今、あなたは実は中間点にゐるのだ、と。

初心の方もまた中間点にゐるのです。他の人と比べてどこにゐるのかを測るのではありません。自分における、しかも求道上の位置です。教えの分量でも、聞いた年数でもありません。求道というのは常に自己を中間点に置く営みなのです。ですから初心の方も仏法に出会ったことを感謝し、そこで自分なりに立ち上がって、これから自分の足で求めていくのだという気持ちをしっかりと持ち、歩みを進めて欲しいと思います。

ベテランの人も、何十年のご教化に感謝し、さらに立ち上がって、いよいよ自己を深めていく歩みをどうか推し進めていただきたい。前の半偈と後の半偈の教えには、このような意味合いがこめられているのではないかと思います。

いずれにしましても、雪山童子の求道は、道を求めることを巧みな譬えでよく表しているように思え、この教えを幾度もいただいて、とても有り難く、感謝の心が起こってきます。お互い、雪山童子のように、とは簡単にいきませんが、その万分の一の求道心でも起こして、共に真実を求めて歩いていくことができれば、大変有り難いことと思います。

(完)

